

みよし文化財だより

発行:文化財保護課(歴史民俗資料館) 電話 049-258-6655

「みよし文化財だより」は文化財保護課(歴史民俗資料館)が作成する不定期刊行物です

三芳と藍 ～藍畑が広がっていた、かつての三芳～

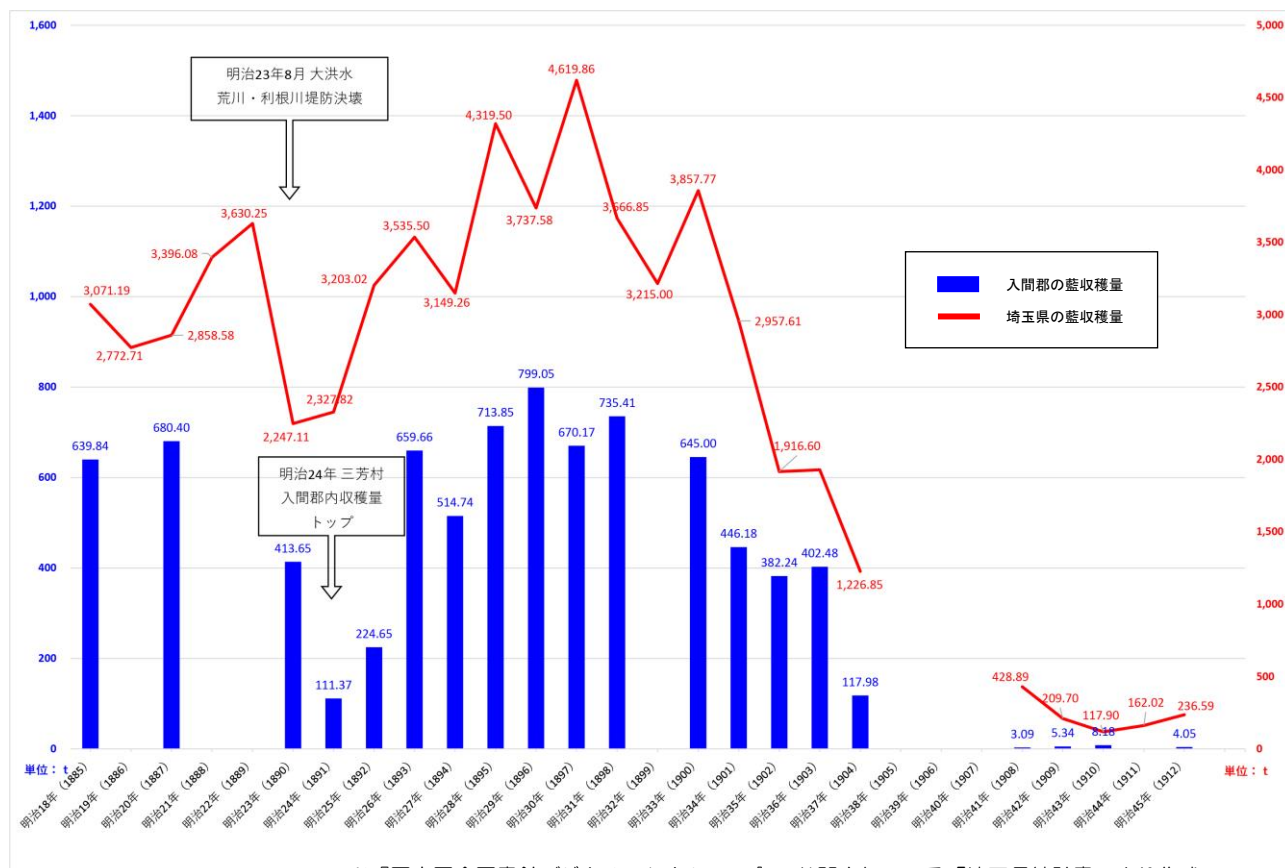


藍といえば徳島県が全国的に知られていますが(阿波藍)、深谷市で生まれ育った渋沢栄一も取り組んでいたように、かつては埼玉県でも藍がさかんに作られ(武州藍)、明治時代初め頃には全国 2 位の生産量がありました。

幕末から明治時代にかけて、三芳でもまた藍葉を栽培して染料を作り、糸や布を染める一連の作業が行われていました。今では想像もできませんが、三芳の地にも藍畑が広がっていた時代があったのです。

■ さかんに作られていた藍

「藍刈や 一里四方に 木も見えず」とは、明治 25 年(1892)に正岡子規が詠んだ句ですが、この頃には、埼玉県内でも利根川流域の本庄、深谷、妻沼地域と荒川流域の川島、吉見、川越、所沢地域で藍がさかんに作られていました。下図は、明治 18 年(1885)から明治 45 年(1912)までの埼玉県と入間郡の藍葉収穫量の移り変わりをまとめたグラフです。



※『国立国会図書館デジタルコレクション』で公開されている「埼玉県統計書」より作成

※明治 19・21・22・32・38・39・40・44 年はデータが公開されていないため数値未記入

埼玉県・入間郡ともに、明治 23 年（1890）に荒川・利根川の大洪水による不作で急激な落ち込みはあるものの、明治 29～30 年（1896～1897）まで収穫量は増加します。しかし、それ以降は減少に転じ、埼玉県は明治 43 年（1910）にはピーク時の約 3%、入間郡は明治 41 年（1908）にはピーク時の約 2%まで激減してしまいました。

こうした背景には、明治 36 年（1903）にドイツから、工場で大量かつ安価に作られた合成藍（インディゴピュア）の本格的な輸入が始まったことがあります。これを受けて、国内の藍葉生産は急速に衰退していきました。なお、三芳村でも藍はさかんに作られており、明治 24 年（1891）には入間郡トップの約 85t を生産していました。

■ 三芳の藍屋・紺屋

農家が育てた藍葉は、藍屋を営む農家が買い取りました。藍屋では、まず藍葉を乾燥させた後、潰して発酵させてスクモにします。さらにスクモを丸めて乾燥させて藍玉を作り、主に所沢方面へ出荷していました。三芳には、竹間沢と上富に 1 軒ずつ藍屋がありました。

竹間沢の藍屋で、現在は資料館敷地内に移築復元されている旧池上家住宅では、母屋の庭先に 2 棟の小屋を建て、藍玉を作っていました。ここでは、藍葉を甕に入れて水を施しながら発酵させ、発酵した藍を臼に移して水を加えながらつき、丸めて乾燥させて藍玉にしました。明治 40 年（1907）頃まで藍玉を作っており、当時は「藍大尽」（藍で財を成した人）とよばれていました。上富の藍屋では、幕末から明治 15 年（1882）にかけて近所の方や住み込みの方を 4～5 人雇い入れ、藍玉作りを大規模に行っていました。



藍屋のほかにも、藍を使って様々なものを染める紺屋の家が藤久保と上富に 2 軒ずつありました。藤久保の 1 軒では 2 代にわたって紺屋を営み、糸を染めて所沢へ出荷していました。上富では明治 38 年（1905）頃まで、八王子・熊谷・足利の絹を染めたり、刑務所の青半纏を染めたりとさかんでした。

左の写真は、「藍」と書かれた鬼瓦です。鬼瓦は家のシンボルとしての役割もあることから、この瓦が屋根につけられていた時代、まさに三芳が藍とともにあったことを象徴しています。

■ 今に息づく藍

今では町内のどこにも藍の面影は見られませんが、その美しさや風合いは人々を引きつけて止むことはなく、現在もサークル活動として様々な方法で藍染めを楽しむ方々がいます。また、町内の竹間沢公民館敷地内では、地域の方が毎年藍を育てており、秋にはたくさんさんの小さな花を見ることができます。時代が移り変わっても決して色あせることのない藍の魅力は、今も三芳に息づいているのです。（文：大久保）